

学校保健 実技研修会 終了報告

テーマ	「頭がいい」ってどういうこと？ ～特別な支援が必要な子に対する支援方法～	
日時	令和6年8月27日(火)	
会場	石狩教育研修センター	
講師	村田 敏彰 氏 (北海道文教大学人間科学部こども発達学科 教授)	
参加者	89名	
研修会 の 様子		演習① 私たちが児童生徒のことについて「頭がいい」というときには、「どのようなこと、状態、場面」なのか、グループで意見を出し合い、分類してみた。多くの考えが出され、多様な捉え方を心掛けていることがわかった。
		「認知」「知能」について 日ごろ見える行動やテストの結果から、子どもの能力を評価してしまいがちになる。そこに抽象的、精神論的な評価ではなく、「認知」「知能」といった客観的なとらえ方で子どもを理解することが必要であることを学んだ。日常の子どもの様子から、子どもがどの部分を苦手としているのか考えることで、心理検査を行えなくても適切な課題を考えられるということは、大きな学びであった。
		知能検査について 発達支援や学習指導の方向性を検討することが目的である、ということを押さえることが大切である。検査の結果でわかることは、日常と異なる場面での客観的データであり、その子のもつ特性や思考パターンが色濃く出てくることがわかった。
		演習② 「ノートをとらない子」の原因をグループで話し合い、分類してみた。全体で交流した時には、自分たちの話し合いには上がらなかった考えが話され、子どものとらえ方がさらに広がったと感じた。理由や原因を客観的に考えることは、常に支援の基本であることを改めて学ぶことができた。
		検査は万能ではなく、解釈も仮説であることを押さえる。行動観察では日常と異なる環境で実施することで、いつもと異なる行動をする場合もあるが、それは誰かの責任ではなく、「子どもが環境に応じた行動をとっている」と解釈するという説明があった。このときに、保健室に来室しているときに見せる様子と、家庭、教室とは異なることを思い出していたのか、多くの参加者がうなずいていた。